

(追加資料 25.1.22) 「聖書が語る知恵」

(教皇フランシスコの回勅「ラウダート・シとともに暮らす家を大切に」)

65 人間の世界との関わりについて、創造の神学の全体を繰り返さなくても、聖書の物語から学ぶことができる。創世記冒頭の第一の創造記事によれば、人類を創造することが救いの計画に含まれている。男と女を創造なさった後、「神はお造りになったすべてのものをご覧になった。見よ、それはきわめてよかった」(創世記 1:31) のである。

すべての人は愛から創造され、神にかたどり神に似せてつくられた(創世記 1:16, 「愛が神から出る者で、愛する者は皆、神から生まれ、神を知っているからです(一ヨハネ 4:7)。」)と聖書は教える。それは、「単なる物でなく、人格」であり、自分を知り、自分を所有し、自分を自由に与え、他に人々と親しく交わることができる(カテキズム 357)。」一人一人の人のはかり知れあない尊厳を示している。聖ヨハネ・パウロ二世は、創造主のそれぞれの人に対する特別な愛が、「その人の無限の尊厳を授ける」と言われた。・・・

66 創世記の中の創造記事は、それぞれ象徴的で物語的な言葉で、人間存在とその歴史的現実についての意味深長な教えを語っている。密接に絡み合う根本的な三つの関わり、すなわち、神との関わり、隣人との関わり、大地との関わりによって、人間の生が成り立っていることを示唆している。聖書によれば、命にかかわるこれら三つの関わりは、外面的にも内面的にも引き裂かれてしまった。この断絶が罪である。わたしたちがずうずうしくも神に取って代わり、造られたものとしての限界を認めるのを拒むことで(手引き 9 頁参照)、創造主と人類と全被造物の間の調和が乱されたのである。このことによって、わたしたちに与えられた、地を「従わせ」(創世記 1:28)「そこを耕し、守る」(同上 2:6) という統治の責任にゆがみが生じたのである。その結果、もともとは調和がとれていた人間と自然との関わりが不調和を来すようになった(同上 3:17-19 参照)。

67 わたしたちは神ではない。大地は、わたしたちより前から存在し、それはわたしたちの与えられたものである。・・・すなわち、ユダヤ・キリスト教の考えが、大地への「支配権」と人に与える創世記の記事(創世記 1:28 参照)に基づいて、人間の本性を暴君的なものとして描くことで、自然に対する無制限な搾取を助長してきたという告発に対してである。これは教会の理解する聖書

の正しい解釈ではない。キリスト者が時に聖書を誤って解釈したのは事実だが、今日では、われわれが神にかたどって創造された大地への支配権を与えられたことが他の被造物への専横な支配権を正当化するとの見解は、断固退けなければならない。聖書が世界という園を「耕し守る」よう告げている（創世記 2:15 参照）ことを念頭に置いたうえで、その本文を文脈に沿い適切な解釈法をもって読むべきである。「耕す」は培うこと、働くこと、働きかけることを、「守る」は、世話は世話し、保護し、見守り、保存することを意味する。人間と自然との間には相互責任という関わりが存在するとの含みがそこにはある。各共同体は、生存に必要なものなら何でも大地の恵みからいただくことができるが、大地を保護し、その豊饒さを将来世代のために確保する義務もある。「地は主のもの」（詩編 24:1）であり、「地と地にあるもすべてのもの」（申命記 10:14）は、主のものである。こうして神は、絶対的な所有権を要求するあらゆる権利主張を退けられる。「土地を売らなければならないときにも、土地は買い戻す権利を放棄してはならない。土地はわたしのものであり、あなたたちはわたしの土地に寄留し、滞在する者にすぎない」（レビ記 25:23）とあるとおりである。

71 「地上に人の悪が増し」（創世記 6:5）、主が「地上に人を造ったことを後悔し、心を痛められた」（同上 6:6）にもかかわらず、神は、^{とが}咎なく正しい人とどまったノアを通して、救いの道を開くことをお決めになった。こうして神は人類に新たに歩み始める機会をお与えになった。

72 詩編は、「大地を水の上に広げた方」である創造主なる神への賛美をしきりに勧める。

73 預言書は、宇宙を創造された全能の神を観想することで、試練の時にあらたな力を見出すよう、わたしたちを招く。さらに、神において愛情深さと力強さとは結ばれており、それゆえ神の無限の力が、その父親のような優しさからわたしたちを遠ざけることはない。エレミヤ 32:17,21 参照。イザヤ 40:28b-29 参照。

74 バビロニアへの強制移住の経験は、神へのさらなる深い信仰へと導かれる霊的な回心となった。・・・全能の神へのいやます信頼のうちに慰めと希望を再び見出したのである。

75 神が全能であり創造主であることを忘れる霊性を受け入れることはできない。そうすると、地上の諸力を礼拝し、あるいは神の地位を力づくで奪い、神の創造の御業を踏みにじる無制限の権利を主張してしまう。